

神戸の女子高、短大、大学における コーヒーに対する意識調査

信 時 哲 郎

キー・ワード：神戸、女子高、短大、大学、タバコ、酒、コーヒー、喫茶店、カフェ

筆者は数年前より、神戸の地場産業たるコーヒー産業、そして喫茶業について研究している。しかし、ゼミなどで学生たちと意見を交換しているうちに、彼らの嗜好品意識が、筆者の嗜好品意識とずいぶんと違っていることに気付かされた。学内でタバコを吸う学生はよく見かけていたが、目につかない変化、すなわち彼らが酒やコーヒーをほとんど飲まないことについては、彼らと話をしてみるまで気が付かないでいた。

外食産業の伸び悩み、ことに喫茶店や居酒屋の不振について耳にすることは多いが、その原因は長引く不況のためばかりでなく、若者たちのこうした嗜好品意識の変化も影響しているのではないだろうか。

そこで今回は、筆者のコーヒー、喫茶店・カフェ研究の一環として、現時点における神戸(西宮を含む)の若者たちの嗜好品意識を調べることにした。

調査対象は神戸山手大学の学生82人(うち49人が男子学生)、神戸山手短期大学の学生25人、神戸女学院大学の学生43人の計150人。筆者の担当する授業に参加する学生全員(重複して授業を履修している学生は、いずれか1つの授業で回答させた)にアンケート調査を行った。ただし学年については、筆者の担当科目に偏りがあるため不均等で、有意な項目であるとは考えにくいので、本稿の考察の対象からはずした。調査期間は2004年の5月から7月である。

また神戸山手女子高校(437人)でも、2004年6月に教室でアンケートに答えてもらった。内訳は1年が127名、2年が127名、3年が183名である。

1 喫茶店からカフェへ

報告の前に、筆者が今まで調べてきた神戸における喫茶店とカフェの歴史と現状について書いておきたい¹⁾。

大きな傾向として指摘できるのは、従来型の喫茶店が減っている一方で、街のあちこちにカフェという新しいスタイルの店が生まれていることである。

ただ、両者の違いはきわめて曖昧である。と言うのも、カフェの定義が難しく、最大公約数

的に「ここ数年の間に開店(リニューアル)した若者をメイン・ターゲットとする喫茶店」と言うのが精一杯だからだ。

なにしろスターバックスやタリーズなどのシアトル系と呼ばれる大規模チェーン店がカフェを名乗るだけでなく、元々は雑貨店だった店が飲食物を提供するようになったカフェ、パンやケーキの専門店が店先に椅子やテーブルを置いたカフェ、採算は度外視して、道行く人にゆとり・くつろぎを提供したいというカフェ、自分が理想的だと思うライフスタイルを提言しているというカフェ、中国茶の専門店、ペットと一緒に飲食ができるカフェ、昼間にも営業を始めた居酒屋やバー、逆に夜間営業にも積極的に取り組んでアルコールやおつまみ類を置くようになった喫茶店……と、その性格を特定するのは困難で、無理に定義を下したところで現状とのギャップが激しくなるだけのようにも思える。

しかし、「喫茶店」を掲げる店が減り、「カフェ」を名乗る店が増えているという現象は誰の目にも明らかであろうし、銀行も「喫茶店には出資しないがカフェには出資する」などと囁かれているようである²⁾。

こうした変化はなぜおこったのだろう。考慮すべきことはあまりに多く、簡単に結論は出せそうにない。ただ、以下に挙げる点は、やはり「最大公約数的に」認めることができるのではないかと思う。

① 個人経営の限界

従来型の喫茶店は、経営者の年齢と共にインテリアやメニュー、雰囲気等が陳腐化し、いつしか若者たちが立ち寄りにくい場所となり、よほどの地の利があるか、安定した固定客がいなければ営業が難しい状況となっている。

加えて、これらの多くが個人経営であるため、スタッフの入替や大規模なイメージチェンジが経費の面からも難しく、それが一層、問題解決を困難にしている。

② カフェブームがブームを呼ぶ

カフェは、一般的にスタッフが若く、凝ったメニューやインテリア、BGM、雰囲気、コンセプトなどが若い層に受け入れられているようだ(一部では、喫茶店の店主が子供や孫に店を譲り、カフェとして復活を遂げている場合もあるという)。

ただ、そのカフェにしても、不況やデフレにより、客足は必ずしも好調であるとは言いがたく、財布の紐も堅い。開店後わずか数ヶ月で閉店に追い込まれることも少なくない。しかし、それでも「自分の店を持つ」という夢の実現に賭けようとする若者の数は、不況下における就職難やテナント料の下落等から、しばらくは減ることがなさそうだ。

③ ライフスタイルの変化

コーヒーの愛好者が若年層で減っていることは、全日本コーヒー協会の調査等でも指摘されているが、「コーヒーを飲まないから喫茶店に行かない」というだけでなく、「喫茶店に行か

ないからコーヒーを飲まない」側面もあるはずだ。と言うのも、タバコや酒、コーヒーなどの嗜好品を、本当においしいと感じるようになるには、ある程度の時間が必要だからだ。先輩や上司に連れられて喫茶店に入るうちに、あるいはいろいろな機会にコーヒーを勧められるうちに、いつしかコーヒー愛好家になっていたという人は多いと思うが、同じ環境にいる同じ年齢の人間としかつきあいのない若者が増えたために、コーヒー愛好家が減ってきたと言うこともできるのではないだろうか。

この他にも思いあたることはある。ファストフード店、ファミレス、コンビニといった「安心して入れる店」がどこにでもできたこと。これらに比べると、よくも悪くも個性的な喫茶店は、若者たちにとって少々敷居が高くなってしまっている気がする。また、かつて喫茶店が提供していた「飲み物、会話、座席、音楽」が、「ペットボトル、携帯電話(メール)、ジベタリアン、ウォーキング・ステレオ(ウォークマンやMD、iPodなど)」といった新しい風俗によって、簡単に充足されてしまい、これも客足を鈍らせている原因だと考えられる。

2 神戸の食文化

神戸が異国情緒の漂う街であることは、今更指摘するまでもあるまい。

街中には、神社仏閣よりも教会の高い尖塔が日につき、関帝廟、イスラム寺院、ジャイナ寺院なども控えている。したがって、神戸市民の食生活にも外国文化の影響は及んでおり、日本一のコーヒー会社であるUCCが本社を置き、インスタントコーヒーのシェアが日本一のネスレ、炭火焼コーヒーを発売したハギハラコーヒー、その他多くのコーヒー関連会社が神戸に本社を置いているのも、こうした神戸の歴史・文化と無関係ではあるまい。

そして案外知られていないのは、日本における喫茶店・カフェの歴史の上でも、神戸が特別な役割を果たしてきたということである。

神戸では早くからコーヒーを飲む習慣が根付いており、三宮神社の境内にはコーヒーを飲ませる露店がひしめき、ミーコ(ミルクコーヒー)を提供するミルクホールも繁盛していたという。神戸には日本で始めてコーヒーを客に出したと言われる放香堂があり(実際は、「日本初」ではなかったようだが)、時代を下れば、パウリスタやユーハイム、三星堂などの有名喫茶店があったことでも知られている(現在はユーハイムのみ営業中)。昭和23年にはストレートコーヒーを日本で初めて提供したと言われるにしむら珈琲店が開店。昭和41年には日本初の高級喫茶店とされる茜屋珈琲店が営業を始め、日本における喫茶店のスタイルを確立させている。また、近年でも「カフェ・ブーム」のはしりと言うべきマザームーン・カフェが神戸に生まれており、その他にもア・ラ・カンパニユ、トゥース・トゥースなどが神戸のケーキと共に全国的な注目を集めている。

神戸に新しい喫茶店・カフェ(スタイル)が生まれたのは、「新しいもの好き」と言われる神戸っ子の心性も影響していようが、なによりも食生活がそれだけ西洋の食生活に近かったこと

を指摘しておくべきであろう。

神戸市民の食生活の特徴は、総務省統計局の家計調査(都市階級・地方・県庁所在地別1世帯当たり年間の品目支出金額)を検討してみれば明らかだ。

平成15年の調査によると、神戸市民が1世帯当たりで1年間に消費する米の額は24,523円。全国40位である。その代わりに、パンの消費額は米よりも多くて、1年間に26,961円。全国6位となっている(米よりもパンの消費が多いのは全国の都道府県庁所在地と川崎市、北九州市をあわせて49都市のうち6都市のみ)。

菓子類は総額で全国19位。ほぼ全国平均レベルであるが、それは、おそらくは和菓子の購入金額が低いことで、洋菓子、ことに(カステラ、ケーキ、ゼリー、プリン以外の)洋生菓子は5,997円で全国1位である。

外食に関して言えば、「食事代」としては全国で7位。しかし、和食はそのうちのなんと48位(最下位は沖縄)。中華も意外に低くて31位。洋食もなぜか45位と低い。ただ「他の主食的外食」(仏・独・伊・印・韓などのレストランがここに入ると思われる)を見ると、東京(108,495円)に次ぐ2位の108,438円で、3位の千葉市を25,000円も上回っている。

以上のデータから、神戸の食生活が「和風に遠く、西洋風に近い」ということは明らかであろう。

そして喫茶代は、平成15年に全国5位(名古屋、岐阜、さいたま、東京、神戸の順)。金額こそ年々減っているものの、ほぼ低位置をキープしている(平成12年・5位、平成13年・4位、平成14年・4位)。そして、そこで飲まれているのは、データから類推する限り、コーヒー(全国20位)でも緑茶(全国26位)でもなく、紅茶(全国1位)であるようだ。

ちなみに神戸市民は乳酸菌飲料(全国48位)や炭酸飲料(全国44位)、コーヒー飲料(全国40位)、果実・野菜ジュース(全国37位)をあまり飲まないようで、近代文明・西洋文明は積極的に受け入れてきたものの、昭和以降の「新しい飲み物」に関してはあまり積極的に受け入れていないようである。

3 神戸の短大・大学における嗜好品調査

神戸山手大学・神戸山手短期大学・神戸女学院大学の3校で行ったアンケートは、タバコ、酒、コーヒーという3つの嗜好品について、日常的に嗜んでいるかどうか、好きな理由(嫌いな理由)、愛好者に関するイメージなどを問うものである。

表1

タバコについて

タバコを日常的に吸っていますか？

吸っている	吸っていない
20.7	79.3

吸う理由は何ですか？

気分転換	なんとなく	ストレス解消	味や香りが好きだから	その他
29.0	29.0	16.1	9.7	16.1

吸わない理由は何ですか？

吸う意味を感じないから	健康に悪いから	煙がキライだから	値段が高いから	その他
38.1	28.3	23.0	2.7	8.0

タバコを吸う人についてどう思いますか？

体に悪そう	かっこ悪い	大人っぽい	流されやすい	男っぽい	カッコイイ	その他
56.6	5.5	4.1	4.1	2.8	2.8	24.1

酒について

酒を日常的に飲んでいますか？

飲んでいる	飲んでいない
25.3	74.7

飲む理由は何ですか？

味や香りが好きだから	気分転換	なんとなく	人間関係を維持するため	ストレス解消	その他
45.9	16.2	16.2	8.1	5.4	8.1

飲まない理由は何ですか？

機会がないから	アルコールに弱いから	アルコールがキライだから	健康に悪いから	値段が高いから	その他
33.3	28.8	10.8	6.3	4.5	16.2

酒を飲む人についてどう思いますか？

大人っぽい	体に悪そう	カッコイイ	男っぽい	流されやすい	かっこ悪い	その他
20.6	19.9	5.0	4.3	4.3	1.4	44.7

コーヒーについて

コーヒーを日常的に飲んでいますか？

飲んでいる	飲んでいない
41.3	58.7

飲む理由は何ですか？

味や香りが好きだから	なんとなく	気分転換	その他
54.8	24.2	8.1	12.9

飲まない理由は何ですか？

味がキライだから	機会がないから	匂いがキライだから	健康に悪いから	値段が高いから	その他
56.8	23.9	3.4	1.1	1.1	13.6

コーヒーを飲む人についてどう思いますか？

大人っぽい	カッコイイ	男っぽい	体に悪そう	流されやすい	その他
42.5	8.2	4.1	2.7	0.7	41.8

タバコを日常的に吸っているという学生は31名(20.7%)で、吸っていないという学生は119名(79.3%)であった。男子学生については46.9%がタバコを吸っており、タバコを日常的に吸うと答えた女子学生の7.9%を大きく引き離している。

「平成13年 国民栄養調査」(厚生労働省)によると、20歳から29歳の男性のうち58.9%が喫煙の習慣を持ち、女性の16.1%が喫煙の習慣を持つのだという(全体では男性が45.9%、女性が9.9%)。年齢とデータ採集の時期に違いはあるものの、今回の調査では男女共に喫煙者は少なめである。

1986(昭和61年)に広島県のS大学で行った調査では、男子学生の52.8%、女子学生の4.8%が喫煙の習慣があると答えており、今回の調査と比較すると、男性の喫煙者が減り、女性の喫煙者が増えていることになる³⁾。

吸う理由としては、「気分転換」と「なんとなく」が共に同数で最多の29.0%。以下、「ストレス解消」が16.1%、「味や香りが好きだから」が9.7%、「その他」が16.1%だった。選択肢には「人間関係を維持するため」もあったが、回答者はいなかった。

逆に、タバコを吸わない理由としては、「吸う意味を感じないから」が38.1%と最も多く、以下、「健康に悪いから」が28.3%、「煙がキライだから」が23.0%、「値段が高いから」が2.7%、「その他」が8.0%だった。「喫煙場所が減ったから」という選択肢も設けたが、回答者はいなかった。

タバコを吸う人について持っているイメージについて聞いたところ、「体に悪そう」がトップで56.6%、以下、「カッコ悪い」が5.5%、「大人っぽい」と「流されやすい」が4.1%、「男っぽい」と「カッコイイ」が2.8%、「その他」が24.1%となっている。「女っぽい」という選択肢も設けたが、回答者はいなかった。

酒に関しては、日常的に飲んでいるという学生が38名(25.3%)、飲んでいないという学生が112名(74.7%)と、タバコとはほぼ同じ比率であった。ただ、男女比については飲んでいるという男子学生が22.4%、女子学生が26.7%と、わずかではあるが、女子学生の方が多かったのが印象的である。

「平成13年 国民栄養調査」によると、20歳から29歳の男性のうち35.7%に飲酒の習慣があり、女性では9.3%に飲酒の習慣があるという。女子学生は大健闘をしている反面、男子学生は全国レベルに及んでいない。

1986(昭和61年)に広島県のS大学で行った調査では、男子学生の83.0%、女子学生の73.8%が酒を飲んでおり、約20年間に学生気質はずいぶん変わったことを感じさせる⁴⁾。

酒を飲む理由としては、「味や香りが好きだから」が最多で45.9%、以下、「気分転換」と「なんとなく」が同数で16.2%、「人間関係を維持するため」が8.1%、「ストレス解消」が5.4%、「その他」が8.1%だった。

酒を飲まない理由としては、「機会がないから」が33.3%と最多で、以下、「アルコールに弱いから」が28.8%、「アルコールがキライだから」が10.8%、「健康に悪いから」が6.3%、「値段が高いから」が4.5%、「その他」が16.2%であった。

酒を飲む人について持っているイメージについて聞いたところ、「その他」が44.7%と約半数に達してしまっただけで、「何も思わない」に類するコメントを書いた学生が7名いたことから、コメントを書いていない学生も、同意見の者が多かったと考えられるが、中には「おっさんっぽい」や「中年」といったイメージを抱く学生、また「うらやましい」や「楽しそう」というものもあり、案外、複雑なようである。以下の順位は、「大人っぽい」が20.6%、「体に悪そう」が19.9%、「カッコイイ」が5.0%、「男っぽい」と「流されやすい」が同数で4.3%、「かっこ悪い」が1.4%だった。「女っぽい」という選択肢も設けたが、回答者はいなかった。

コーヒーに関しては、日常的に飲んでいるという学生が62名(32.3%)、飲んでいないという学生が88名(58.7%)で、今回調査した3つの嗜好品の中では、最も愛好者が多かった。

男子学生のうちコーヒー愛飲者は44.9%、女子学生は39.6%と、性別による差はあまり顕著ではない。つまり、タバコだけが性別による差が大きいという結果となったが、これは女性愛煙家にとって、「日常的にタバコを吸っている」と答えにくい事情があるということの証明でもある。もちろん美容や健康に気を遣っているからでもあるのだろうが、いずれにしても、実際はヘビースモーカーでありながら、自分では「日常的に吸っているわけではない」と答えている場合もあると考えられる。

全日本コーヒー協会の『コーヒーの需要動向に関する基本調査 2002』によると、18~24歳の男性の79.3%がコーヒーを好んでおり、女性の66.4%が好んでいるとなっているが、とてもその数値には達していない⁵⁾。ただ、かつてはコーヒー嫌いだった卒業生が「仕事をするようになって、コーヒーやビールを本当においしいと思うようになった」と語っていた例もあり、筆者としても共感できるところがあるので、学生と社会人の間では嗜好品の摂取について大きな違いのある可能性もある。が、これは今後の課題としておきたい。

さて、コーヒーを飲む理由としては、「味や香りが好きだから」が最多で54.8%、以下、「なんとなく」が24.2%、「気分転換」が8.1%、「その他」が12.9%だった。「ストレス解消」や「人間関係を維持するため」という選択肢を選んだ学生はいなかった。

コーヒーを飲まない理由としては、「味がキライだから」が最多で56.8%、以下、「機会がないから」が23.9%、「匂いがキライだから」が3.4%、「健康に悪いから」と「値段が高いから」が同数で1.1%、「その他」が13.6%だった。

コーヒーを飲む人について持っているイメージについては、「大人っぽい」が最多で42.5%、次いで多かったのが「その他」の41.8%。「何も思わない」に類するコメントを書いた学生が9名もいたことから、コーヒーについて、特別なイメージのない学生がほとんどであったことが

考えられる。以下、「カッコイイ」の8.2%、「男っぱい」の4.1%、「体に悪そう」の2.7%、「流されやすい」の0.7%が続いている。「女っぱい」と「かっこ悪い」という選択肢も作ったが、これに回答する学生はいなかった。

タバコの愛好者に対しては「体に悪そう」というマイナスイメージが半数を超え、コーヒーについては「大人っぱい」や「カッコイイ」といったプラスイメージを持つものが半数を超えた。ただ、酒に関しては、「百薬の長」と言われる反面、アルコールが体に及ぼす悪影響も広く知られており、そうした両義性がそのまま今回の回答にも反映されたようで、プラスイメージとマイナスイメージはちょうど拮抗していた。

また神戸女学院大学と神戸山手短期大学(平成15年度から共学となったが、男子学生数は少なく、筆者が担当する学科の男子学生は0名)における結果も興味深い。というのも、これら「女子大」での嗜好品愛好度が、すべて高くなっているからである。両クラスを併せた68名のうち、タバコは8.8%と微増に留まったものの(全体では7.7%)、アルコールは35.3%と約10ポイント増(全体では26.7%)、コーヒーは44.1%と約5ポイント増加している(全体では39.6%)。男子学生の目を気にせず、自分たちの嗜好をそのまま愛好できる環境であること、そしてアルコールに関してはコンパの誘いの多さといったところも影響しているのかもしれない。

相関関係については、どの嗜好品にも手を出さない学生が男女ともに最多で、全てを嗜んでいる学生が3.3%でしかなかった。筆者の学生時代と比べると隔世の感があるが、今後の日本人の食文化、ライフスタイル、産業構造について考える上では、気になる数字である。

相関関係

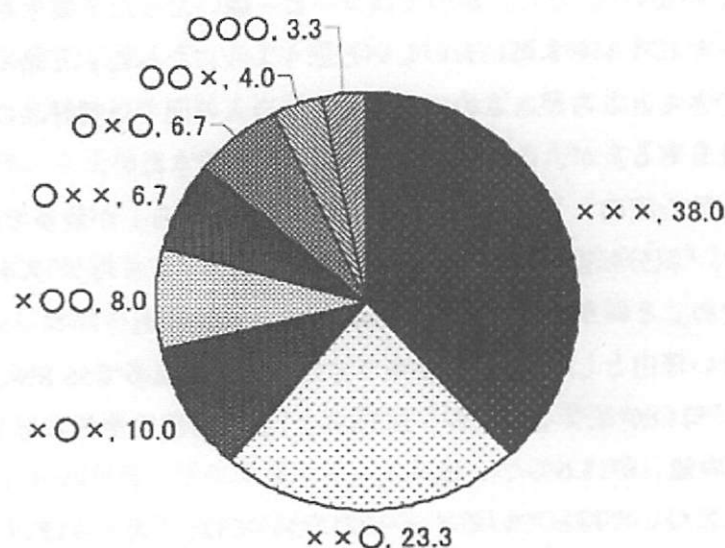


図1

表2

タバコ	×	×	×	×	○	○	○	○									
酒	×	×	○	○	×	×	○	○									
コーヒー	×	○	×	○	×	○	×	○									
学生全体	男子学生	38.0	26.5	23.3	20.4	10.0	4.1	8.0	2.0	6.7	14.3	6.7	16.3	4.0	10.2	3.3	6.1
	女子学生		43.6		24.8		12.9		10.9		3.0		2.0		1.0		2.0

4 神戸の女子高におけるコーヒー、喫茶店・カフェ調査

併設の神戸山手女子高等学校でも同じような調査をしたが、全員が未成年であることから嗜好品調査とせず、喫茶店やカフェに関する意識調査を行った(ただしコーヒーに関する質問は大学生・短大生への質問項目と同じ)。

表3

コーヒーについて

コーヒーを日常的に飲んでいますか？

飲んでいる	飲んでいない
36.8	63.2

飲む理由は何ですか？

味や香りが好きだから	なんとなく	気分転換	ストレス解消	人間関係を維持するため	その他
41.9	41.3	7.4	1.2	1.2	6.8

飲まない理由は何ですか？

味がキライだから	機会がないから	匂いがキライだから	健康に悪いから	値段が高いから	その他
51.5	26.2	3.1	2.7	1.2	15.4

コーヒーを飲む人についてどう思いますか？

大人っぽい	体に悪そう	カッコイイ	男っぽい	流されやすい	かっこ悪い	その他
66.7	5.1	3.8	2.0	0.8	0.3	21.5

喫茶店について

喫茶店には日常的に行きますか？

行く	行かない
39.1	60.9

喫茶店に行く最大の目的は何ですか？

おしゃべりをするため	飲み物を飲むため	疲れを癒すため	落ち着いた時間が欲しいため	食事のため	その他
40.2	22.0	13.3	12.4	6.6	5.4

喫茶店にはどれくらいの頻度行きますか？

毎日	週に1回程度	2週間に1回程度	月に1回程度	年に1回程度	その他
3.3	27.9	24.6	34.9	2.9	6.3

コーヒーを日常的に飲んでいると答えた生徒は総数437名のうち161名(36.8%)、飲んでいないと答えた生徒が276名(63.2%)であった。学年別に見ると、1年生でコーヒーを日常的に飲むという生徒が54名(42.5%)、2年では37名(29.1%)、3年で70名(38.3%)であった。学年とはあまり関係がないようである。

『コーヒーの需要動向に関する基本調査 2002』によると、中・高生の男性50.4%がコーヒーが好きだと答え、女性の43.5%が好きだと答えている⁵⁾。

コーヒーを飲む理由としては、「味や香りが好きだから」が最多で41.9%、以下、「なんとなく」が41.3%、「気分転換」が7.4%、「ストレス解消」と「人間関係を維持するため」が同数で1.2%、「その他」が6.8%だった。

逆にコーヒーを飲まない理由については、「味がキライだから」が最多で51.5%、以下、「機会がないから」が26.2%、「匂いがキライだから」が3.1%、「健康に悪いから」が2.7%、「値段が高いから」が1.2%、「その他」が15.4%だった。

コーヒーを飲む人のイメージとしては、「大人っぽい」が最多で66.7%、以下、「体に悪そう」が5.1%、「カッコイイ」が3.8%、「男っぽい」が2.0%、「流されやすい」が0.8%、「かっこ悪い」が0.3%、「その他」が21.5%だった。「その他」のうち、約半数が「特に何もない」に類する答を書いていた。「女っぽい」とする回答は、ここにもなかった。

続いて、喫茶店やカフェ(以下、この章では省スペースのために「喫茶店」と表記)に日常的に行くかという質問に対しては171名(39.1%)が行く、266名(60.9%)が行かないと答えている。学年別に見ると、1年生で日常的に喫茶店には行くと答えた生徒が64名(50.4%)、2年では55名(43.3%)、3年で52名(28.4%)であった。

喫茶店には予想に反して多くの生徒が行っており、学年が進むとともに喫茶店に出入りする生徒が少なくなっているのも予想外であった。コメントから想像すると、低学年の間は親と一緒に喫茶店に出入りしているが、学年が進むと勉強やクラブに忙しくなり、親よりも友人関係が濃密化することによるのではないかと思われる。つまり、行きたい気持ちはあっても、時間的に都合がつけにくく、また、経済的な後ろ盾がなくなるために足が遠のいていると考えることができる。

また、コーヒーを飲まないと答えている生徒でも、喫茶店に出入りする者が多いという点も注目される。29.1%しかコーヒーを飲まない高校2年生が、43.3%も喫茶店に日常的に足を運んでいるというのが好例だが、図にも示したとおり、コーヒーを飲み、喫茶店にも行くという生徒が49名(11.2%)、コーヒーは飲むが、喫茶店には行かないという生徒が112名(25.6%)、コーヒーを飲まず、喫茶店にも行かないという生徒が154名(35.2%)。しかし、コーヒーは飲まないが、喫茶店には行くという生徒が122名(27.9%)もいた。

これは喫茶店に行く最大の目的は何かという質問に対して、「おしゃべりをするため」が

コーヒー嗜好と喫茶店

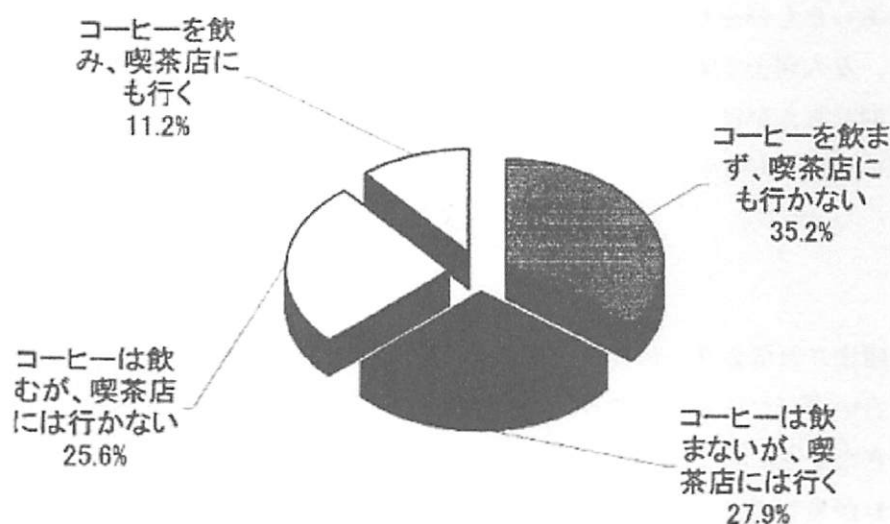


図2

40.2%と最多であったことから裏付けられよう。もちろん「飲み物を飲むため」も次点で22.0%と検討しているが、喫茶店の定番がコーヒーであるということなど彼女たちの頭にはない(以下、順に、「疲れを癒すため」が13.3%、「落ち着いた時間が欲しいため」が12.4%、「食事のため」が6.6%、「その他」が5.4%だった)。

頻度については、「毎日」と答えた生徒が3.3%、「週に1回程度」と答えた生徒は27.9%、「2週間に1回程度」と答えた生徒が24.6%、「月に1回程度」が最多で34.9%、「年に1回程度」が2.9%、「その他」が6.3%であった。

これらの結果から、神戸が「コーヒーの街」ではなくとも、少なくとも「喫茶店の街」ではあることの証明ができるかもしれない。と言うのも、前著でも述べたとおり、神戸の下町エリアは喫茶店の密集度が高く、リビングがわりに利用する人や、毎朝、喫茶店でモーニングを食べる人も多いからだ¹⁾。

その他に気づいたこととしては、自由解答欄に10%ほどの生徒が喫茶店の値段の高さに言及していたことがあげられる。

高校生が経済的にあまり余裕がないのはわかるが、こうした不満が出るのは、喫茶店での飲食が、コンビニで売られているペットボトルの飲み物の値段や、その他のお菓子類の値段と比較されているからではないだろうか。なにしろコンビニ店の前に座っての飲食や街中を歩きながらの飲食、バスや電車の中での飲食が常態となった今となつては、喫茶店での飲食は相対的にかなり割高になり、それがこうした不満になっているのだと考えられる。

もちろん、中には喫茶店やカフェの雰囲気を楽しみ、そこで働いてみたいと書いている生徒、自分のお気に入りの店を列挙してくれた生徒もいたが、少数派であった。

また、初めて高校でアンケート調査を行って気付いたのは、データの入力中、自由記入欄に

全く同じ文章が書かれたアンケート票に出くわすことが少なくなかったことである。中には一度書きかけてあったものをわざわざ消して、同じ文章に書き直しているものさえあった。アンケート調査は、友人同士で楽しみながら書いてくれればと思っただけだったが、友人同士で相談した結果、全く同じ答えを書いてくれたってしまったようなのである。これはこれで女子高校生の心理として面白い研究テーマかもしれないが、データの純粋性は損なわれてしまったと言わざるを得ない。

5 おわりに

調査対象も限定されており、母数も決して多いとは言えない調査であったが、若者たちの嗜好品との付き合い方、コーヒーや喫茶店、カフェとの付き合い方について、おおまかな傾向は把握することができたように思う。

しかし、それが果してコーヒーの街、喫茶店・カフェの街である「神戸らしい」結果であったかと問われれば、全国的な調査、そして数年前の調査と比較する限り、あまりその証拠は見つけ出せなかった。

筆者は神戸のコーヒー、喫茶店・カフェについて研究しているが、これを単なる研究に終わらせず、神戸の新しい観光の目玉にできないかとも考えているところである。今回の調査結果は、筆者の遠大な計画にとっては、必ずしも幸先のよいものではなかったが、タバコやアルコールと違って、コーヒーを健康上の理由から忌避する回答が少ないだけでなく、「大人っぽい」、「カッコイイ」とプラスイメージで評価している若者たちが多かったわけであるから、コーヒー愛好者の数はもっと増えてもおかしくはない。そもそも食生活がこれほど西洋化しているというのに、コーヒーの普及がジリ貧状態だという状況ははなはだ不自然であるように思う。

今、さまざまな形態のカフェが街に現れているが、おそらくはこうしたムードが若者たちに新しいコーヒーの楽しみ方、新しい喫茶のあり方を考える契機にさせているのだろう。2002年秋には神戸山手大学にコーヒー同好会が設立されたが、神戸の中心地にある大学だけに象徴的である。

神戸の歴史と文化を踏まえながら、新しいコーヒー文化、喫茶文化が、神戸でまた花開くことを期待して擱筆することとしたい。

注

- 1) 神戸山手大学環境文化研究所編『神戸カフェ物語』(神戸新聞総合出版センター、2003年12月)
- 2) 沼田元氣・堀内隆志『ぼくの伯父さんの喫茶店学入門』(ブルース・インターアクションズ、2001年8月)
- 3) 岸本郁美、荒谷春恵、木原富枝「大学生の嗜好品に対する意識調査 第3報 たばこについて」(『鈴峯女子短期大学研究集報 自然科学28』1987年12月)
- 4) 岸本郁美、荒谷春恵、木原富枝「大学生の嗜好品に対する意識調査 第2報 アルコール飲料について」(『鈴峯女子短期大学研究集報 自然科学28』、1987年12月)
- 5) 「コーヒーの需要動向に関する基本調査 2002」(全日本コーヒー協会、2003年6月)